



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | That noise? It's some boys playing outsideの構造 : 'pseudo-modifiers' の再考            |
| Author(s)        | 葛西, 清蔵                                                                            |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要, 31(1), 1-30                                                           |
| Issue Date       | 1982-09-30                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33467">https://hdl.handle.net/2115/33467</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 31-51_PL1-30.pdf                                                                  |



# That noise ? It's some boys playing outside. の構造

—— ‘pseudo-modifiers’ の再考 ——

葛 西 清 蔵

0. はじめに
1. 従来のかい
2. same boys playing は一つの「要素」か
3. playing の「一時的」なとらえ方
4. plasing の「同時的」な性質
5. 「直接知覚」に関連して
6. some boys playing は「新情報」である
7. 日本語の対応する表現
8. 「知覚動詞」がとる構文の中での位置づけ
9. ま と め

0. 1 a That noise ? It's some boys playing outside.

b あの音（かい）？（あれば）子供たちが外で遊んでいるのだ。

1 a に対する日本語は 1 b のようになると思うが It's 以下（以後「問題の文」とする）はいくつかのきわめて特徴的な性質をもっている。くわしくは、あとでみることになるが、多くの場合そうであるように、よく似た構造と並べられて扱われたりするので、逆にこの構造のもつ固有な性質がそれとしてなかなかつかみきれていないように思う。少稿は Akmajian, Gee, Rudford たちのように、この種の文の深層構造はどうあるべきかをいおうとするものではない。深層構造がどうあるべきか

を問う前にまずこの構造がもついくつかの特徴を明らかにしようとするものである。

1. Declerk と Rudford は間接的に「問題の文」を扱っているが、Declerk はまず、2 a に対して 2 b のこたえがなりたつとする。

2 a (Jane) What is the noise ?

b (John) It's the boys (that one) teasing a dog.

この文脈では that are は任意的だというのである。しかし、それでいいとしてこのとき that are の that の性格が実ははっきりしない。考えられるのが 3 a - c の可能性であろう。

3 a It is ... that ... は分裂文 (cleft sentence).

b 制限的な関係代名詞 (restrictive relative).

c the boys のかわりに Bill など固有名詞もとれるところから非制限的な意味の関係代名詞 (non-restrictive relative).

Declerk はこれらの可能性をつぎつぎに検討していく。その結果、およそ、a については、分裂文では that 以下が古い情報であり、省略できるのに 2 b ではできない。b については、that の前に固有名詞もくることができる可能性があるから制限的ではありえない。c. 非制限節では that の前に音調のきれめがあり、that 以下は補足的な節になるが、2 b ではそうならない、などの点から、これらのいずれでもないと結論する。そして Declerk はこの構造を独特な性質をもつものであるとして、“pseudo-modifier,” Rudford は“pseudo-relative”とよぶのである。

しかしこの議論はあくまで任意的な that 節を含んだいくつかの文で論じられているわけであって、積極的に「問題の文」の性格がそれとして問題にされているわけではない。なされている議論のうちで、「問題

の文」との類似点が間接的にであれよみとれるのはつぎの点である。

- 分裂文では受動態にすると「前提」がちがってしまう。(It's the dogs that are beating a dog. と It's a dog that is being beaten by the boys.) が 2 b のような構文ではこういうことはない。(That noise, it's the boys that are beating a dog. と That noise, it's a dog that is being beaten by the boys.)
- 英語ではおなじ性質のものは連結できる (I saw a girl and two boys.) が、性質がちがう時は非文となる (\*I saw a girl and that John was worried.). (That noise you heard was John (who was) beating up Marry and Marry's sister (who was) screaming for help. と \*That noise you heard was John (who was) beating up a girl and the girl who had brown hair.).<sup>(1)</sup> あとの非文では最後の節が制限的であり、そうでないものとは連結できない、とする。
- The noise you hear is John (who is) beating his wife. という文は「既知」の John について、補足的に who is ... をつけた文ではない。John が wife をなぐるという 'event' の noise を言っているのである。
- 非制限的な節ではその節は求められる情報を含んでいるわけではなから省けるが、2 b のようなつぎの文では that 以下は重要な情報であり省くわけにはいかない。(What is that noise? It's the boys (that are) teasing a dog.)
- 制限的な関係節の文から who be を省いて「問題の文」のように分詞をもつ文はつくれるが、非制限節の方はそれほどこんたんには

いかない。

・非制限節ではつぎのように ‘stack’ できないが, pseudo-modifier のようなときはできる。It’s John (who is) blowing his nose (who is) making a lot of noise.

検討されているあとのほとんどの文では「問題の文」がそれとして対象になっていない。つまり pseudo-modifier / pseudo-relative との関係で「問題の文」を扱おうとする限り, この文の固有の性質が明らかにならない。これからはなれて「問題の文」の性質をさぐることにする。

2. まず, この文が It is ... ではじまることが形の上で重要なことなのだが, この点はあとでふれることにする。これにおとらず重要で注目すべきなのは「問題の文」の構文は sound, noise, sight についてのべる文であることが圧倒的に多く, 「知覚動詞」の目的語を特定しようとする文に多いことである。<sup>(2)</sup> これは 1 a, 2 a, b つぎの 5 a, b でもわかる。

- 5 a The noise you hear is John (who is) beating his wife.  
b It is John beating his wife.  
c I saw John beating his wife.

まずこの John beating his wife. という構造の性質であるが,<sup>(3)</sup> Akmajian は, この部分を, Pseudo-cleft, Equative colon construction, Right node raising<sup>(4)</sup> により, また Declerk はさらに Left dislocation, Right dislocation, Object shift, Subject raising<sup>(5)</sup> により John beating が一つの構成要素であることを示している。これによれば, たしかに名詞とあとの分詞の関係のふかさは示されたことになる。しかしここで注意しないといけないのは, 5 b や 6 のように固

That noise? It's some boys playing outside. の構造

有名詞がありうること、さらに Pseudo-cleft, Passivization などにより名詞は分詞から引きはなすことができることである。<sup>(6)</sup>

6 I heard John teasing a dog.

つまり beating を限定的とみるとすればそれは一方的である。Akmajian, Declerk の示すのはせいぜい限定的な可能性もあるということにすぎない。これでは単なる制限的な関係代名詞の消去にすぎない。この稿の目的はこのような限定的な例をあつかうことでは勿論ない。

さて、つぎの7の文で、7 a に対しては7 b が当然のこととして含意されており、これは7 c の them としてあらわすことができる。

7 a I saw the boys teasing a dog.

b I saw the boys.

c I saw them.

ところがつぎの例はどうであろう。

8 What / \*Who I heard was John laughing.

9 a (Jane) That noise? It was John falling down the stairs.

b (Tom) Yes, I heard it / ? him too.

10 What / \*Whom we saw was two girls (that were) playing together.

11 What was that noise yesterday?

It now seems that it was John falling down the stairs, which / \*whom we had not realized at the time.

—以上 Declerk.

12 J'ai vu Marie qui descendait l'escalier, et Pierre aussi l'a vu. (I saw M. (who was) going down the stairs, and P. also saw it).

13 Je n'ai jamais vu *ça*, Marie qui joue du piano. (I've never seen *that*, M. (who is) playing the piano).

—以上 Rudford.

これらの文で、さされるものが *it*, *which*, *le*, *ça* で受けられていることはこれらが確実に人だけでなく、それを含む「事態」*'event'* をさしているのであり、John beating his wife が「ネクサス」としてとらえられていることを示している。このことは、また

14 Some boys (who were) playing outside *was* / *\*were* what caused the noise.<sup>(7)</sup> — Declerk.

14では Some boys playing outside が「ネクサス」をなし、これが主語になっているからこそ *was* と単数でうけられることもわかる。さらに15で、

15 John saw Bill looking at *himself* in the mirror.

— Declerk.

*himself* は Bill であり、Bill 以下が一つの文構造をもつこと、Bill が意味上の主語になっていることをはっきり示している。

これまで見てきた例でも「直観的」(intuitively)にこの John は意味上の主語であり、beating は述語とわかるのであるが、そうすると16 a, 17 bの各文が。

16 a (That noise?) It's John (who is) playing the piano.

That noise? It's some boys playing outside. の構造

b (That noise?) PRO be <sub>s</sub>[John PROG play the piano]<sub>s</sub>.

17 a Mary saw John playing the piano.

b Mary PAST see <sub>s</sub>[John PAST PROG play the piano]<sub>s</sub>.  
— Declerk.

16 b, 17 b の構造から導かれるとする考え方もそれなりに正当性はあると考えられる。

これでわれわれは、John beating his wife の beating は John に対する修飾語ではむろんなく、意味上の主語 John に対する述語としてはたつき、これらが一つの「ネクサス」全体としてとらえられうることを示したことになる。

つぎは、「知覚動詞」との関連でこの構造の特徴を検討したい。

3. 「知覚動詞」は18 a, b の構文をとることができるが、これが、

18 a I saw the boys teasing a dog.

b I saw the boys tease a dog.

19 a It's the boys teasing a dog.

b \*It's the boys tease a dog.

19 b のように「to なし不定詞」になると非文になってしまう。また、

20 a \*What we saw was Raquel Welch take a bath.

b \*It was Raquel Welch take a bath that we saw.

c \*Raquel Welch take a bath is a breathtaking sight to see —

d \*Raquel Welch take a bath has been witnessed by many a moviegoer.  
—以上 Akmajian.



20の例文はすべて非文だが to なし不定詞の take を taking にするとすべて非文でなくなる。18の文が両方よく、19 b, 20 a - d が非文ということから「問題の文」の決定的な特徴の一つは「to なし不定詞」と現在分詞の差にあるにちがいないと予想することができる。

ところで、この両者のちがいは一般によく知られているものであり、たとえば、21の a, b において、21 a には 22 a が、21 b には 22 b

21 a I saw the man cross the road.

b I saw the man crossing the road.

22 a The man crossed the road and I saw him do this.

b The man was crossing the road, and I saw him while he was doing this. —以上 Hornby.<sup>(8)</sup>

が対応するという。つまり cross では、横切るのをはじめてから終りまで見ていたことになるし、crossing では横切る動作の途中をみたことになる。<sup>(9)</sup> ここで注目したいのは、これはあくまでとらえ方のちがいだということである。つまり、cross と crossing はその動作の時間的な長さのちがいではなく、その動作をとらえる側のとらえ方のちがいであり、cross に対して crossing は見た時の、その瞬間にしていた一時的に見たときの動作としてとらえられているということである。

このことはつぎの文でもはっきりするように思う。

|                 |                                                                                                                                                                                                                                                 |       |
|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
|                 | { <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">                     running across the street.<br/>                     *own a car.<br/>                     nude.<br/>                     *intelligent.                 </div> |       |
| 23 a I saw him  |                                                                                                                                                                                                                                                 |       |
|                 |                                                                                                                                                                                                                                                 |       |
|                 |                                                                                                                                                                                                                                                 |       |
|                 | { <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">                     shot.<br/>                     stabbing pigeons.                 </div>                                                                                      |       |
| b John saw Bill |                                                                                                                                                                                                                                                 | sick. |

—太田<sup>(10)</sup>

That noise? It's some boys playing outside. の構造

{ \*tall.  
in the room.  
\*(going) to see the movie.

— Milsark.

つまり、一時的な動作としてとらえる running, nude, shot, stabbing ... はよいが、そうではない own, intelligent, tall などでは非文になってしまう。また、

24 a \*I saw him be rejected.

b I saw him get rejected.

—以上 Bolinger.

25 We watched the rebels { get } executed by the army.  
{ \*be }

— Akmajian.

24, 25の非文は「状態」としてみた be と、一時的な動作としてとらえた get のちがいであるとみることができる。<sup>(11)</sup>

では一体なぜ‘一時的’なとらえ方をした現在分詞の形が要求されるのであろうか。これは結局「知覚動詞」のもつ基本的な性質によると思われる。すなわち、

26 a I saw a flash of light.

b ?I watched a flash of light.

c I watched the flash of light.

— 以上Kirsner and Thompson.

26 b の watch に対して「定」(definite) でない一瞬の a flash of light を意図的に見る (watch) ことは不自然であり、26 c のように the flash

of light となると flash を予想し目をこらして見ることができる。ところがおなじ「知覚動詞」でも「非意図的」(non-voluntary), 受身的<sup>(12)</sup>な see の方には「一時的」なしかも「定」でない a flash of light がふさわしいのである。

これは逆にいうと本来 ing 形をとらない「状態動詞」であってもつぎの文のように「一時的」なとらえ方をするのがふさわしいこの構文では許されることになる。

- 27 I just can't picture John {  
 owing a mansion.  
 knowing the answer.  
 weighing 300 lbs.

— Akmajian

すなわち「問題の文」の the boys teasing a dog はなによりも「一時的」なとらえ方をして表わす表現であることを確認しなくてはならない。これは4.でのべることとふかくかかわる。

4. つぎに「問題の文」にはもう一つの特徴的な性質がある。

- 28 I saw {  
 a the boys tease a dog.  
 b the boys teasing a dog.  
 c \*the boys have teased a dog.  
 d \*the boys having teased a dog.  
 e \*the boys will tease dog.  
 f \*the boys teased a dog.<sup>(13)</sup>

これらの非文から the boys のあとには tease, teasing が続くことができるだけで、完了や未来を表わす場合には非文となる。つまり the boys のあとの「時」は主文の時制によってきびしく制限されており、<sup>(14)</sup>

That noise? It's some boys playing outside. の構造

主文の saw と時間的におなじ動作の表現しかくることができない。この構文においては、その動作は「一時的」にとらえられた場合であれ、時間的な長さをもってとらえられた場合であれ、主文の動詞の時と「同時的」でなくてはならない。これはきわめて当然なことで、「知覚の対象の存在は知覚作用と同時的でなければならない」<sup>(15)</sup> という明確な理由によるのである。

- 29 a Did anyone hear John leave the house?  
b Did you see / notice anyone go out?  
c We felt the house shake.  
d Watch that boy jump. —以上 Hornby.
- 30 a They saw the thief running away.  
b They heard voices calling for help.  
c She could feel her heart beating wildly.  
d Can you smell something burning? —以上 Hornby.

29, 30の例文でも、「同時性」は他の「知覚動詞」にもあてはまりいずれも 'laying hold of sense data'<sup>(16)</sup> つまり「直接知覚」, physical perception であるし、当然のことながら、「to なし不定詞」, 現在分詞であらわされる動作は主文の時と「同時」である。The *sound* of a door *opening*. the *sound* of the door *sliding* back. a *noise* of people *coming*. the *sound* of a key *being* turned in the lock —A. Christie の例もこれを示している。

ちなみにこの「同時性」はつぎのような動詞があらわれる構文にも見られることを指摘しておこう。これらの例文はいっそう「同時性」の性質をうきたたせるであろう。

- 30' a We can't *let* the matter rest here.  
b Shall I *help* you carry that box upstairs?

- c Can we *make* the murder look like an accident?
- d Don't let me *catch* you doing again!
- e We musn't *keep* them waiting. — Hornby.

29-30'では動詞はいずれも「同時的」であり「直接」的であり、「目標指向的」,<sup>(17)</sup>「間接性」をあらわす「to 不定詞」をとれないことも共通している。「to 不定詞」,「to なし不定詞」両方をとれる動詞の場合でも、「to 不定詞」をつける文では意味が「直接的」でなくなってしまう。

- 31 a We heard them enter. / I saw him leave.
- b They were heard enter. / He was seen leave.
- 以上Bolinger.

- 32 a He was seen to be a complete charlatan.
- b \*We saw him (be) a complete charlatan.
- c We saw him to be a complete charlatan. — 以上中右
- 33 a I saw him to be abnoxious.
- b I apprehended the fact that they were (abnoxious)
- 以上Bolinger.

31 aに正確に対応する受動態は31 bのように to のつかない形であると Bolinger はいう。また32 aの受動態の文に対応するのは実は32 bではなく、to のある32 cだという。この to のある32 cの文はもはや「直接知覚」の文でなく「事実」として「認識」したという意味になってしまう。このことは33の文でもはっきりする。「知覚動詞」では「to つき不定詞」はむしろ that 節に対応するのである。最後に to がつくと「直接的」でなくなってしまうもう一つの例をみよう。

- 34 Jack was so drunk he couldn't walk, so I helped him
- $\left\{ \begin{array}{l} \phi \\ ?to \end{array} \right\}$  get into the car. — Borkin.

That noise? It's some boys playing outside の構造

35 a He helped me climb the stairs by propping me up  
with his shoulder. (He climbed with me).

b He helped me to climb the stairs by cheering me.

— Akmajian.

34, 35 a のように to のないときは「直接」自ら手をかけてやったことになる（したがって34の to はおかしい）し、35 b のように「間接的」な助け方には「to つき不定詞」がふさわしい。

「知覚動詞」はその性質上、知覚されるものが「同時的」に「直接知覚」されるものとしてあることを要求する。そして the boys teasing a dog. はまさにそれにそうものである。

5. 「知覚動詞」は「定動詞」をもつ節を従えることもあるが、その場合の意味の特徴を明確にして、「問題の文」の意味とのちがいをはっきりさせておきたい。

36 a She noticed them to be gaining on us (She became aware of the fact).

b She noticed them gaining on us (She saw them do it).

— 以上Bolinger.

37 a I hear you've been abroad.

b I see you've broken the teapot.

c We felt you'd like to know.

— 以上Hornby.

まず36 a の文に与えたパラフレーズでもわかるように「to 不定詞」は b の「直接知覚」とはちがう「事実」の認識という意味をもつ。これは37の文について、feel では「physical (肉体的) でない感覚」を表わすときにはこの型（定動詞節）で用いられるし、hear では‘知る’、‘知らされる’の意味のときはこの型で用いられるというように定動詞節をと

るときには「直接知覚」のときは意味がちがいが、see も節をとるときには「直接見る」のではなく「わかる」という「間接的な認識」をあらわすことになる。つまり、定動詞をもつ節をしたがえるときは対象を直接に知覚するよりむしろ間接的にその事態を一つの出来事として「認識」することを表わすのである。これは典型的な「間接報告」,<sup>(18)</sup>「心的知覚」,<sup>(19)</sup>「概念的」<sup>(20)</sup>な構文である。

38 a I heard that Susan passed her exam.

b ?I heard Susan pass her exam.

— 以上Kirsnir and Thompson

「試験にうかる」ということから間接的な報告としてきき、それとして認識できても、自分の感覚器官で直接に知覚する対象にはなりにくいのである。

以上で「知覚動詞」はその補部の中に「定動詞」をもつ節をとるか、「to なし不定詞」、「to 不定詞」をとるか、「現在分詞」をとるかによって意味に微妙なちがいがあることがはっきりした。

the boys teasing a dog. (名詞+現在分詞) の場合についてまとめるとつぎのようになる。

39 a 意味上の主語と述語からなる「ネクサス」構造であること。

b 主文の時と「同時的」であること。

c 意味上の主語の様子を「一時的」にとらえた表現であること。

d b, c から「知覚動詞」の構造にいた性質をもつこと——「直接知覚」の構造であること。

e したがって「to つき不定詞」、「to なし不定詞」、「定動詞」をもつ (that) 節をとりえないこと。

That noise? It's some boys playing outside の構造

6. 前の項では、the boys teasing a dog のもつ特徴が「知覚動詞」との関係で示された。この項では「問題の文」の It is との関係をみようと思う。

40 That noise? It's some boys playing outside. (= 1 a)

40の中では It はなにをさすのだろうか。

41 The noise you hear is John (who is) beating his wife.

— Declerk.

42  $\left\{ \begin{array}{l} *He \\ It \end{array} \right\}$  is a quite a sight, a little boy getting his first

haircut.

— Gee.

41, 42からわかるように41では The noise が主語であり、42では It は sight である。the noise は John beating his wife のものであり、a sight は a little boy getting his first haircut のものである。つまりこの構造での It はそういう 'deictic' なものと考えてよい。より一般的には C. O. D. の定義通り 'the thing previously mentioned or implied or easily identified'<sup>(21)</sup> としておいてもよい。<sup>(22)(23)</sup>

すでに1. でみたようにこの構造では teasing 以下も重要な情報になっているのであって省略されることはできない。この「ネクサス」の意味上の主語置 John など固有名詞がくることでもわかるように「既知」のものであってもよい。新しい情報として提示されさえしていればよい。要は「ネクサス」全体がひとまとまりとなって新しい情報をつくっていることである。

以上で「問題の文」のもつ構造の特徴が明らかになったと思う。「問題の文」は、



- 43 知覚されうるある「もの」の「一時的」にとらえられた様子を  
表わす「ネクサス」が「新しい情報」となり、It is の補語（「ネ  
クサス補語」? ）として示された構文。

ということができる。

「新情報」という点に関連して there is 構文にふれておくべきだろ  
う。というのは Milsark は there is の「存在」文と「知覚動詞」の  
間に関連があることをつぎの例で指摘しているからである。

- 44 a There were several people { shot.<sup>(24)</sup>  
stabbing pigeons.  
sick.  
\*tall.  
in the room.  
\*(going) to see the movie.
- b John saw Bill { shot.  
stabbing pigeons.  
sick. (=23 b)  
\*tall.  
in the room.  
\*(going) to see the movie.

there is 構文と「知覚動詞」がとる構文の関係は明白であり、there  
is 構文においても「一時的」にとらえられた様子の表現があとに続く。  
is 以下の要素が「既知」であれ「未知」であれ全体として「新情報」と  
なることはよく知られている。<sup>(25)</sup> この点はすでに論じてあるのでこれ  
以上深入りしないが、<sup>(26)</sup> 「知覚」しうる「もの」の「存在」を中心にこれ  
ら三つの構文、①「問題の文」、②「知覚動詞」の構文、③there is 構  
文は密接な関係にあることがわかる。

「知覚」するにはその対象となるものが「知覚」と「同時」に存在しなくてはならないことはすでにみた。C. O. D. が be を exist と定義し, exist を be found 定義している。(ちなみに sich befinden, se trouver もおなじく「存在」の意味をもつ。)<sup>(27)</sup> 感覚でとらえないものはこのような構文はとりえない。過去, 未来のものも「知覚」の対象にならないしこの構文はとりえない (このことはすでに 4. でみた)。つぎの例もこのことをはっきりさせるであろう。

45 a I see the man cross the road.

b \*The man crossed the road and I see him do it. —中右

46 a The doctor watched my foot  $\left\{ \begin{array}{l} \text{bleeding} \\ *hurting \end{array} \right\}$  badly.

b We saw them  $\left\{ \begin{array}{l} \text{looking} \\ *feeling \end{array} \right\}$  pretty sick.

c We watched the subject  $\left\{ \begin{array}{l} \text{listening} \\ *hearing \end{array} \right\}$  some noises.

—以上 Akmajian.

45 a では cross が「同時的」であるが, b では過去の動作 (crossed) をいま見ることはできないから非文。46 では視覚的にそれとしてとらえられないので視覚の動詞とは共起できない例。

47 a I have watched poverty ruin many farmers.

— Kirsner and Thompson.

b I could smell the toaster burning the toast.

— Akmajian.

c I can see the wood burning. — Gee.

47 a では \*I have watched poverty. が非文であるところから watch

の目的は poverty ruin many farmers だという説明は正しくないだろう。farmers は視覚的にとらえうるわけであり、many farmers are ruined by poverty として考えればおかしくない。47 b では toaster がにおうわけではないので the toaster burning the toast 全体が一つの意味単位 (a single semantic unit) となりこれによって表わされるものがにおうのだとするがこれは正確ではなく、toast がこげているにおいが「存在」し、それが smell の対象になっているのである。... smell the toast burning in the toaster とすればわかって。47 c で wood が見えてる必要がないというが、燃えてる煙、焰はみえてるはずであり、それが wood であると判断するのはすでにそこに wood があると「前提」されているからだだろう。これは the wood と限定されているところでもわかる。比喩的な場合を別にすれば「知覚動詞」の対象になるものは、また「知覚動詞」とふかくかかわる there is 構文、「問題の文」の構文をとるにはその対象が「同時的」に「存在」しなくてはならないのである。

7. 「問題の文」の構造はいままで見てきたように「知覚」にふかくかわり、ことばの中では基本的な表現であるように思う。この項では「問題の文」に対応すると思われる日本語の表現にふれてみたい。

48 a That noise? It's some boys playing outside. (= 1 a)

b あの音? (あれは) 子供たちが外で遊んでいるのです。

(= 1 b)

c あの音? \*(あれは) 子供たちが外で遊んでいるです。

48 a に対する日本語は最初にもあげたように 48 b のようになるだろう。のほかにところもよいように思う。(のもところも全体を名詞(句)化してひとまとめにするとところは英語の場合、ひとまとまりの「ネクサス」としてふるまうのとなて興味ぶかいがここではこれ以上ふれない)。

- 49 a (さっきの) あの音はなんだ? — 屋根から雪が  
 { \*落ちるのです。  
 落ちたのです。
- b (今の) あの音はなんだ? — 子供たちが  
 { \*さわごうとしているのです。  
 さわいでいるのです。  
 \*さわいでいたのです。

49の例文から日本語でもやはり「同時性」ははっきり守られていることがわかる。

- 50 a あのにおいは魚がこげているのです。  
 b (あそこに見える) あれは馬が走っているのです。  
 c この感触はなんだろう? — 虫かなんかが動いているのでは?

50の各文でもこの表現は他の感覚器官にもあてはまることがわかる。

- 51 a (むこうに見える) あれは? { \*弟が背がたかいのです。  
 ?弟がおよぐのです。  
 弟がおよいでいるのです。
- b (今の) あの音は? { \*鐘がひびきがいいのです。  
 \*鐘が大きいのです。  
 ?鐘がなるのです。  
 鐘がなっているのです。

51の各文は、「一時的」にとらえられる表現しかあらわさず、特徴的な性質などを表わすものはやはり非文になる。

また日本語では「既知」であれ、「未知」であれ、「新情報」となるときは、がをとるがこれについてつぎの例をみてみよう。

52 a 何があったのか？——自動車事故  $\left\{ \begin{array}{l} \text{が} \\ * \text{は} \end{array} \right\}$  あったのです。

b 誰がそんなことをいったのか？——ぼく  $\left\{ \begin{array}{l} \text{が} \\ * \text{は} \end{array} \right\}$  いったのです。

53 a どうした？——あの人が撃たれました。

b あの音は？——自動車がぶつかったのです。

52では「自動車事故」，「ぼく」が新しい情報であり，53ではこたえの文全体が新しい情報であるがいずれもがで導かれてくる。ところで49—の例ですでははっきりするようにどの文もがで導かれている。やはり日本語でも「問題の文」に対応するのは「新情報」を提示するものであることは明らかである。

以上のことから対応する日本文も①「同時的」②「一時的」③「新情報」の点で全く「問題の文」と一致することがわかる。このことはつぎの例でさらに明らかになる。「同時性」という点では help, catch など「知覚動詞」のようなふるまいをすることをすでにみたが，これは54の文から日本語にもあてはまることがわかる。

54 a 私は彼が荷物をはこぶの（と こ ろ）を手伝ってやった。

b 犯人がその家に入ろうとしているの（と こ ろ）をつかまえた。

Declerk は take a picture of, imagine などにもたふるまいをすることにふれているが55でみるようにこれにも問題はない。

That noise? It's some boys playing outside の構造

55 a We took a picture of John kissing Mary.

b J. が M. にキスしているの (ところ) を写真にとった。

56 自分が鳥のように空を飛んでいるの (ところ) を想像してごらん。

そのほか Akmajian があげる record / film / tape R. W. taking a bath も R. W. が入浴しているの (ところ) を記録する / フィルムに撮る / テープにとる, とすることができる。

以上のことから「問題の文」は「(…は) …が………の(ところ)です」にすべての面できれいに対応することがわかる。

8. 最後に以上のことをふまえて「知覚動詞」がとりうるいくつかの構造の中で「問題の文」がどう位置づけられるかみてみたい。まず「知覚動詞」がとりうる構造をあげてみよう。<sup>(28)</sup>

57 a I feel that we shall lose.

b I saw at once that he was not at home.

c I hear that you have been ill.

58 a I feel this to be necessary.

b I saw him to be unkind.

59 a She felt summer come.

b I saw something move.

c I distinctly heard him call out for help.

60 a She could feel her heart beating.

b I saw him walking alone in the park.

c I heard her singing a song.

d I smell something burning.

- 61 a I felt a hand on my shoulder.  
 b What do you see on the roof?  
 c I cannot hear you now.  
 d I smell gas.  
 e The cock tasted the soup.

これを整理し、それぞれに関連した事項を対応させてかきこむとつぎの表のようになる。

|    |   |                                                                         |         |                     |                   |  |
|----|---|-------------------------------------------------------------------------|---------|---------------------|-------------------|--|
| 62 | a | that NV                                                                 | N to V: | NV / NVing          | N <sup>(29)</sup> |  |
|    |   | feel                                                                    | ○       | ○                   | ○                 |  |
|    |   | see                                                                     | ○       | ○                   | ○                 |  |
|    |   | hear                                                                    | ○       | ×                   | ○                 |  |
|    |   | smell                                                                   | ×       | ×                   | ○                 |  |
|    |   | taste                                                                   | ×       | ×                   | ○                 |  |
|    | b | NがVする (という) ことを あると : NがVするのを NがVしているの(ところ)を N(という もの)を <sup>(31)</sup> |         |                     |                   |  |
|    | c | indirectness                                                            | :       | directness          |                   |  |
|    |   | abstractness                                                            | :       | immediacy           |                   |  |
|    |   | nonspontaneity                                                          | :       | spontaneity         |                   |  |
|    |   | — Josephs (N. A. McCawley)                                              |         |                     |                   |  |
|    | d | indirect report                                                         | :       | direct perception   |                   |  |
|    |   | — Kirsner and Thompson                                                  |         |                     |                   |  |
|    | e | mental perception                                                       | :       | physical perception |                   |  |
|    |   | — Hornby                                                                |         |                     |                   |  |

That noise? It's some boys playing outside の構造

f conceptual : perceptual — Bolinger

g statement of fact : personal judgement

— Riddle (Gee, Borkin)

日本語の表現は便宜的でこれが厳密に対応するとは思わないが、おおよその関係はつかめると思う。味覚、嗅覚の動詞のふるまいがまずしいのも興味ぶかい。すでにのべてきたことから、62bから62gまであげられている特性からも「知覚動詞」がとりうる構造は点線を境にわけることができる。左側は「ことがら」を認識する場合であり、右側は現にある「もの」を直接に知覚する場合なのである。<sup>(32)</sup>

さらにこの分類からつけ加えるならば、右側によるほど動詞とNの関係は密でNを主語に受動態もつくれるが右側の that NV では NV の関係が強く一つの単位をなしており、もはやNを that をこえて引きだすことはできない。

われわれの「問題の文」It's some boys playing outside. の some boys playing outside は右の部分の NV ing と性質を共有するものである。日本語では認識の対象としての「こと」から、直接に知覚の対象となる「もの」までの中間的ないくつかの段階に対して、それぞれそれにふさわしい表わし方をもっているが、英語の場合ともに thing で表わし日本語ほど細かなそれとしての表わし方をもたないように思う。このために「問題の文」の特徴もとらえにくくなっているであろう。

9. 以上で「問題の文」It's some boys playing outside. の構造の特徴的な面が明らかになったと思う。

- ① It は知覚できるものをさす 'deictic' なものであること。
- ② playing は is の時と「同時的」であること。
- ③ playing は some boys の様子を「一時的」にとらえた表現であること。



④ *some boys* が意味上の主語, *playing* が意味上の述語である「ネクスス」関係をなしていること。

⑤ この「ネクスス」は *playing* が常に新しい情報をふくみ全体が新しい情報をなす補語として提示されていること。

が示された。この「ネクスス」は定動詞をもった節とは明白にちがうものであることもべられた。少くとも「変形」で関係づけられるものではないだろう。これらの事実をふまえ, 「知覚動詞」構文, *there is* 構造との類似性を無視しないでどのような深層構造をたてるのがいいかは各自がコミットする理論の問題である。

— 註 —

- (1) これが非文である理由は別にも考えられるが, それについてはあとでふれる。註(II)をみよ。
- (2) このほかに, (i) に対するこたえ。
  - (i) What is the problem? — Declerk.  
そのほか, *imagine, film, record, photograph* などもある。
- (3) ‘妻をいじめている J.’ となれないことはないが, われわれの趣旨からはなれるので, このような読みの場合は対象にしないことにする。
- (4)
  - (i) I saw the moon rising over the mountain.
  - (ii) What we saw was the moon rising over the mountain. (Pseudo-cleft)
  - (iii) We saw what we had all wanted to see: the moon rising over the mountain. (Equative colon construction)
  - (iv) You can see, but you certainly can't hear, the moon rising over the mountain. (Right node raising)
- (5)
  - (i) The moon rising over the mountain was seen by many people last night. (Passivization)
  - (ii) The moon rising over the mountain, I've seen it often enough. (Left dislocation)
  - (iii) Nobody appears to have seen it, the moon rising over the mountain. (Right dislocation)
  - (iv) The moon rising over the mountain is interesting to watch. (Object shift)
  - (v) The moon rising over the mountain appears to have been seen by many people last night. (Subject raising)

That noise? It's some boys playing outside. の構造

- (6) (i) What we saw rising over the mountain was the moon. (Pseudo-cleft)  
(ii) It was the moon that we saw rising over the mountain. (Cleft)  
(iii) The moon was seen rising over the mountain. (Passivization)  
(iv) The moon is beautiful to watch — rising over the mountain. (Object detetion)  
(v) What did you see — rising over the mountain? (Wh-fronting) — Akmajian.
- (7) (i) The moon and Venus rising in conjunction have / \*has often been  
          {observed        }  
          {photographed} by the astronomers at Kits Peak.  
(ii) The moons of Jupiter rotating in their orbits are / \*is beautiful to watch.  
(iii) The moons of Jupiter rotating in their orbits are / \*is a breath-taking sight. — Akmajian.  
(i)–(iii) では V-ing はたんなる修飾語であろう。
- (8) 1.105 VP 18.
- (9) もっとも、かならずしもこう考えない者もいる。  
(i) We saw her sit / sitting there.  
Kirsner and Thompson は (i) について、これは完結 / 非完結の区別ではなく、むしろ、sit がほかのことはともかく、すわることしかしていない ('obstinate refusal') ことを示し、sitting はただ動かないで、じっとすわったままである状態 ('inactivity') を示しているのだとする。
- (10) p. 501\* Carlson (1977) *Reference to kinds in English* からの引用のようであるが、この本には見あたらない。
- (11) 一般に、おなじ性質のものしか等位接続できないことは知られている。  
(i) \*J'ai vu la femme qui travaille chez l'épicer, et Louise Pierre qui fumait sa pipe. (=I saw the woman who works at the grocer's, and Louise Pierre (who was) smoking his pipe).  
Rudford は (i) が非文なのは pseudo-relative はほかの relative と gapping おこせない、というが、実は、これは前半が travaille (works) と一般的に時間的な長さをもってとらえられているのに対し、後半は一時的なとらえ方をした表現であり、とらえ方にちがいがあるからであろう。
- (12) see には inadvertently (思わず、何の気なしに) が、watch には conscientiously (細心に、用心ぶかく) は共起するがその逆では非文となる。  
(i) The policeman inadvertently saw / \*watched the children cross the road.

- (ii) The policeman conscientiously \*saw / watched the children cross the road. — Kirsner and Thompson.
- そのほか N. A. McCawley (1976), M. H. Klaiman.
- (13) (i) I saw the boys teased a dog.  
(ii) I see them to have arrived. — Bolinger.
- (i) が I saw that the dogs teased a dog と同義のときは、これは「子供たちが犬をいじめるのを知った」で問題にしている場合とちがうのでこの読みの場合は省く。(ii) について Bolinger は「past action now viewed as a fact」と言っておりこれは「見る」ことはできない。
- (14) (i) Je la vois qui fait la noiselle (\*fera / \*ferait / \*avait fait)  
(=I see her (who is )doing washing up (future / conditional / pluperfect) — Rudford.
- さらに註(13)の Bolinger の例文。さらに Rudford は「since tense in pseudo-relative clauses is predictable, we might argue that tense in pseudo-relatives are untensed」といっている。であればこそ、
- (ii) Aux → Tense (M) (have-en) (be-ing).
- (ii) の Tense (M)(have-en) をもたない形をとれるのである。
- (15) 中右。
- (16) Bolinger.
- (17) Bolinger. 'goal-oriented' (i) I'd like you to put in a bid for me.  
(ii) Don't force her to resign.
- (18) Kirsner and Thompson 'indirect report'.
- (19) Hornby 'mental perception'.
- (20) Bolinger 'conceptual' (construction).
- (21) C. O. D. (1976<sup>6</sup>).
- (22) It is の is について Curme (p. 47.) はちょうど「問題の文」を例にあげて、  
(i) Where does all that noise come from?  
(ii) It's children playing upstairs.  
(ii) の is についてつぎのようにいっている。「... the verb which follows situation *it* or an anticipatory subject *it* that points to a following clause is always singular, even though the reference is more than two'. この構文とよく似た there is 構文では be 動詞の数があとに来る名詞の数と一致するのに It is のこの構文で常に単数になるのは、there is 構文ではあとの名詞の数にひかれ、it is では It にひかれているとしかいいようがない。
- (23) すなわち、分裂文とか、予備の It とはちがうものであり、省略されるのが常に wh-be であって、しかも be は主文の時制とおなじものである。この点で、口語でよく省略される分裂文の that; there is 構文  
(i) It was the president himself spoke to me. — Declerk.

That noise? It's some boys playing outside. の構造

(ii) It was John did it. — 村田。

(iii) What was that noise? — \*It was a boy fell down the stairs.  
— Declerk.

の 'pseude-relative clause with *that* omitted' (R. Nagacka) との本質的に異なるものである。

(24) このほかに Emonds の中につきのような例文がみられる。(文に対する判断がかならずしも一致しない例もある。)

(i) \*There are few taxi drivers too rich.

(ii) \*There was one man a pharmacist.

(iii) \*There are many home owners angry.

(iv) \*There are a few photographs too dark.

(v) \*In this course, there are three books important.

(vi) ?There might be some students hungry.

(vii) ?There was a man very sick.

(25) '外界の様子や有様を言語表現として描き出すことによって、新たに状況や場面を導入、設定するといった類型的意味、機能を扱った文が考えられる。この種の表現類型を<状況描写文>と仮称する。……状況描写文は全体が新情報の文である' (仁田)。

(26) 葛西 (1980)。

(27) Rudford は Grevisse の著作のなかに「問題の文」の構造をとりうる動詞として一連の「知覚動詞」があげられていることをのべているが、これらの動詞のほかに *surprendre* (catch), *avoir* (have), *se trouver* (find oneself, be), *être* (be) もみられるのは非常に興味ぶかい。

(28) 例のほとんどは Hornby からとったが辞書からのものも数例ある。

(29) Ross が「名詞らしさ」についてつぎのような順序づけをしているのも参考になる。

|           |                                              |
|-----------|----------------------------------------------|
| that S    | that Max gave the letters to Frieda          |
| for to    | for Max to have given the letters to Frieda  |
| Q         | how willingly Max gave the letters to Frieda |
| Acc. Ing  | Max giving the letters to Frieda             |
| Poss. Ing | Max's giving the letters to Frieda           |
| Act. Nom. | Max's giving of the letters to Frieda        |
| Der Nom.  | Max's gift of the letters to Frieda          |
| N         |                                              |

また Moulton は「はめこみ文」の特徴として (1) Intonation (2) Type (3) Tense (4) Aspect (perfect) (5) Aspect (progressive) をとりあげ、これらの特徴があるかないかで「はめこみ文」にも段階があることを示している。

(30) I could smell that the milk wasn't fresh. — 小西。があるが「こと」は

smell できないから一般的ではないと思いのぞいた。

- (31) Josephs, N. A. McCawley (1978) を参考にしたがあくまで便宜的なものである。

McCawley はつぎのようにいっている。‘... *no* represents a concrete action, state, or event directly perceived by any of five (or six) senses, while *Koto* represents a more abstract concept. ... *Koto* is used for nominalizing a proposition or forming an abstract concept of the proposition, while *no* is used for representing a concrete fact. ... one can see or hear a concrete event, but not an abstract concept.’

- (32) 寺村は右側の性質を‘感覚的, 直観的’とし, ‘……している’, ‘ところだ’があたるとしている。

### References

- Akmajian, A. (1977) “The complement structure of perception verbs in an autonomous syntax frame work” *Formal Syntax* eds. Culicover et al.
- Bolinger, D. B. (1974) “Concept and percept: two infinitive constructions and their vicissitude” *Papers in phonetics*.
- (1973) “Essence and accident:” *Issues in Linguistics* eds. B. Kachru et al.
- Borkin, A. (1973) ‘To be’ and ‘not to be’ *CLS* 9.
- (1975) *Raising to object position*. Bapers in Linguistics Michigan.
- Bresnan, P. and Grimshaw, J. (1978) “The syntax of free relatives in English” *L. I.* 9-3.
- Curme, G. (1963) *Syntax* Maruzen.
- Declerck, R. (1981) “Pseudo-modifiers” *Lingua* 54.
- Emonds, J. (1969) *Root and structure-preserving transformation*. Indiana Univ. Ling. Club.
- Erdmann, P. (1980) “Grammatical peculiarities of the contact clause in early Modern English” *Folia Linguistica* 1.
- Faraci, R. A. (1971) “On the deep question of pseudo-clefts” *English Linguistics* 6.
- Gee, J. P. (1975) *Perception, intertnality, and naked infinitives*. Unpub. Doc. Diss.
- (1977) “Comments on the paper by Akmajian” *Formal Syntax* eds. Culicover et al.
- 樋口 勲 (1979) 「主語と主題」『英語と日本語と』林栄一教授還暦論文集。

- Holvorsen, P. K. (1976) "Syntax and semantics of cleft-sentences" *CLS* 12.
- Hornby, A. S. (1975)<sup>2</sup> *Guide to patterns and usages in English*. Oxford.
- Hornby, P. A. (1971) "The role of topic-comment in the recall of cleft and pseudo-cleft sentences" *CLS* 7.
- Jespersen, O. (1971) *Analytic Syntax* Senjo Pub. Co.
- (1976) *Essentials of English Grammar* George Allen & Urwin.
- Josephs, L. S. (1981) "Complementation" *Syntax and Semantics* 5 Academic Press.
- 葛西清蔵 (1981) 「there was the horse galloping の構造」『北大文学部紀要』29-2。
- Klaiman, M. H. (1981) "Toward a universal semantics of indirect subject construction" *BLS* 7.
- Kirsner, R. S. and Thempson, S. A. (1976) "The role of pragmatic inference in semantics: a study of sensory verb and complements in English" *Glossa* 10.
- 小西友七 (編) (1976) 『英語基本動詞辞典』研究社出版。
- McCawley, N. A. (1976) "From OE / ME 'impersonal' to 'personal' constructions: what is a 'subjectless' S? *Papers from the parasession on diachronic syntax* (eds.) S. B. Steever et al. C. L. S.
- (1977) "On experiencer causatives" *Syntax and Semantics* 6 ed. Shibatani. Academic Press.
- (1978) "Epistemology and Japanese syntax" *CLS* 14.
- Moulton, W. G. (1973) "Sentence features in embedded sentence" *You take the high node and I take the low node*. CLS.
- Muraki, M. (1970) "Presupposition and pseudo-clefting" *CLS* 6.
- Nagucka, R. (1980) "Grammatical peculiarities of the contact-clause in early Modern English" *Folia Linguistica* 1.
- Nakada, S. (1973) "Pseudo-clefts: what are they?" *CLS* 9.
- 中右 実 (1980) 「テンス・アスペクトの比較」『日英語比較講座』第二巻国広 (編) 大修館。
- Nakau, M. (1980). "Tense, aspect, and modality" *Syntax and Semantics* 5
- 仁田義雄 (1979) 「日本語文の表現類型」『英語と日本語と』林栄一教授還暦記念論文集, くろしお出版。
- 中島文雄 (1980) 『英語の構造』(上), (下) 岩波書店。
- 中島文雄・毛利可信 (1964) 『高等英文法』山口書店。
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』大修館。

- Pinkam, J. and Hankamer, J. (1975) "Deep and shallow clefts" *CLS* 11.
- Riddle, E. (1975) "Some pragmatic conditions on complementizer choice" *CLS* 11.
- Rudford, A. (1975) "Pseudo-relatives and the unjty of subject raising" *ArchivumLinguisticum* VI.
- Ross, R. (1973) "Nouniness" 『海外英語学論叢』1975年版, 安井(編), 英潮社。
- Schachter, D. (1973) "Focus and relativization" *Lg.* 49-1.
- Tannenhaus, M. K. and Carroll, J. M. (1975) "The clausal processing hierarchy ... and nouniness" *You take the high node and I take the low node. CLS.*
- 上山恭男 (1980) 「知覚動詞の補文構造に関する一考察」『北海道英語英文学』XXV.
- 好田 実 (1979) 「英語における名詞構文」『英語と日本語と』林栄一教授還暦記念論文集, くろしお出版。